

第4回

【時雨】

時雨は京都盆地の現象で、「ふりみふらずみ定めなき」と言われ、はかなさが本意であるとされる。俳句では能登時雨も季語である。金沢や輪島の冬の日照時間は東京のほぼ三分の一、初冬の降水量は東京の四倍から五倍というのがこの地方の天候の特徴である。

石井和子さんの博士論文によると、『源氏物語』には「しぐれ」が三十一回出て来るのに比べ、『枕草子』には一回だけだという。和歌で涙や悲しみの比喩で「しぐれ」が使われ、物語に適した言葉として平安時代に成立したと分析している。

時雨は晩秋から初冬に始まり、京では大原女が焚木を売り歩き、能登を旅すると美しい顎の女性に出会うという季節である。天気予報では、曇一時雨、曇時々雨の日が多く、時雨の文字が入った予報になる。

京都盆地では冬の昼の虹が、鴨川を渡るように低くかかる。盆地の南は晴れているときの北山時雨による虹である。時雨は日本海から風が吹き寄せて日本列島に雨をもたらせる日本列島特有の気象現象で、日本海側では、時雨が雷をとまなう嵐になることもあり、それは鯨起しなどと呼ばれる。そんな時、芭蕉が「猿も小蓑を」と詠んだ伊賀越えの峠にまでも、日本海からの時雨雲が達することもある。